

## アジアの英語テキストの比較分析 —中国、台湾、タイの中1教科書の比較—

渡辺 清美<sup>\*1</sup>、福井 正康<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> 福山平成大学経営学部経営学科

<sup>\*2</sup> 福山平成大学経営学部経営学科

**要旨:** 日本と同じ EFL 環境にある中国、台湾、タイの中学校1年の英語教科書を計量的手法を用いて比較分析した。Ozasa-Fukui Year Level による日本の学習指導要領に準拠した学年レベル測定では、1. 台湾、2. タイ、3. 中国という順になったが、学年レベルとしてはどれも日本の中学1年次のレベルにあることがわかった。さらにコレスポネンス分析では、教科書の難易とエクササイズの種類に関する特徴が示された。難易度については Ozasa-Fukui Year Level と同じ順序が示され、エクササイズの種類としては、台湾がリーディング中心、タイが4技能のエクササイズ中心、そして中国が会話のエクササイズが多いことが示された。

**キーワード:** アジア英語教科書分析、コレスポネンス分析、リーダビリティ分析

### はじめに

日本では2020年から小学校5, 6年において英語が教科として教えられるようになるが、アジアの多くの国はすでに小学校1年次から英語を導入している。日本と同じEFL (English as a Foreign Language) 環境にあり、さらに相互に近い文化背景を持つアジア諸国の英語教科書を研究することは、これから小学校での英語教育を本格的に始めようとしている日本の英語教育者にとって意義があると考えられる。筆者(渡辺)はこれまでにアジアの教科書と日本の教科書の比較研究を行ってきた。しかし、アジアの国の教科書間の比較研究は行っておらず、また同様の文献も少ないため、本研究は各国の教科書の特徴を探るという意味でも、研究の意義があると考えられる。

### 1. 中国、台湾、タイの初等・中等英語教育の事情

#### 1.1 中国

中国では2001年に教育部基礎教育司(文部科学省の初等中等教育局に相当)が、小学校に英語教育を積極的に推進する意見を表し、それを受けて小学校における英語が必修教科

として置かれるようになった。2011年の教育部が出した「英語新課程標準」では、小学校での学習目標が以下のように置いている（王、2015 p. 38）。

小学校英語学習目標
英語について興味を起し、自信を持ち、いい習慣を身に付け、基礎的な知識とスキルを学ぶ。英語の勉強を通じて、観察、記憶、考え方、想像の能力を発展し、文化の違いを感じ、健康的な人生観を形成しはじめ、今後の発展を目指す。
中学校英語学習目標
英語についての技能、知識、愛情、学び方、文化の意識を基礎としての初歩的な総合能力を養い、生徒の全面的な成長を目指す。

王 (2015, p. 38) によると、中国では、英語教育を通して、「学習ストラテジーや感情態度」も育成することが目標とされている。上記の小学校と中学校の英語学習目標を見ても、知識を身につけると同時に、よい習慣や人生観という英語以外の領域もその目標に含んでいることが特徴である。

また、坂元・張 (2017) によると中国も日本と同じように教科書の検定制度があるが、地域事情も考慮した弾力的な基準になっており、教科書も地域独自のものが発行されているという。

## 1.2 台湾

台湾では、1990年代後半より小中高の順に学習指導要領の改編が行われ、2005年から小学校3年時から英語が必修化された。英語の学習目標としては、小中学校では、次の3つの点が挙げられている（文科省資料「諸外国の外国語教育における目標について」pp. 12-17）。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学習者の基本的な英語の疎通能力を育成し、実際の環境の中で運用できる。</li> <li>2. 学習者の英語学習に対する興味と方法を育成し、自発的かつ効果的に学習できる。</li> <li>3. 台湾および外国の文化風習を理解し、それぞれの文化の違いを比較し尊重できる。</li> </ol> |
|---|

さらに、中学校次における「読む」技能の目標の中に、会話、短文、手紙、物語、寸劇、などの重要な内容や展開を理解できることが特徴である（文科省 Ibid. p. 15）。

## 1.3 タイ

タイでは、1996年に「初等教育、前期中等教育、及び後期中等教育段階における仏暦 2539 (1996年) 英語教育カリキュラム」が告示され、小学校1学年2学期から英語が必修となった。さらに、2001年の「基礎英語教育カリキュラム」によって詳細な英語教育目標が設定された（鈴木、文科省資料）。

教科書については前述の2001年の「基礎英語教育カリキュラム」によって、その採用については従来の厳密な検定制度が廃止され、弾力化がはかられた。それにより小学校では *Let's Go* などの一般のEFL対象の英語テキストも多く採用されている（鈴木、ibid.）。本研究では、中学校で多く使用されている Express Publishing の Access を分析対象として選択

## アジアの英語テキストの比較分析

した。

以下はタイの小学校では修了時と中学校修了時の到達目標である（文科省資料「タイにおける小学校英語教育の現状と課題」）。

<b>小学校6年修了段階での到達目標</b>
1. 自分、日常生活、コミュニティー内の状況について、外国語を理解し、使用することができ、情報の交換、および発表ができ、人間関係を作ることができる。 2. 1,050 から 1,200 語（具体語と抽象語）の範囲内で、自分、家族、学校、状況、食べ物、飲み物、対人関係、趣味、健康・福祉、売買、気候について（聞いたり、話したり、読んだり）外国語を使用することができる。 3. 単文および重文を使って、さまざまな文脈において、意味を伝達することができる。 4. 様々な文脈において、公式および非公式な会話の <b>Text Information</b> および <b>Non-text Information</b> のメッセージを理解することができる。 5. 各学年で経験するメッセージの文脈において、ネイティブスピーカーの生活および言語の文化についての知識、理解を持つ。 6. 外国語を使って、関心および学年に応じて他の学習内容グループの知識について発表でき情報収集する能力を持つ。 7. 追加知識探求および楽しみのために、教室および学校内での言語使用能力を持つ。
<b>第3ステージ（中1～中3）修了段階</b>
1. 対人関係に関する情報を交換し、提示するために外国語を理解して使う。正しい発音と特定の状況にふさわしい身振りや抑揚で、感情、考え、結論を表現する。 2. 2,100 から 2,250 語（具体語と抽象語）の範囲内で、自分、家族、学校、周囲の状況に関するコミュニケーションが可能なリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの能力を有する。飲食物、対人関係、趣味と福祉、売買、気候、教育と職業、観光業と旅行、サービス、場所、言語、科学技術関連の話題について外国語を使用することができる。 3. 重文と複文を使って、さまざまな文脈において、公式および非公式な会話での意味を伝達することができる。 4. 公式および非公式な会話で、 <b>Discourse Markers</b> の付いている <b>Text Information</b> および <b>Non-text Information</b> のメッセージを読み、書きすることができる。 5. 発展レベルで期待される難度に合ったネイティブスピーカーの言語文化、習慣、伝統を学び、理解することができる。 6. 発展レベルで期待されるスキルの難度に合った他の学習内容グループの知識について外国語を使って、情報収集する能力を持つ。 7. 継続的な追加知識探求、楽しみ、進学と仕事の基礎のために、学校の内外において、外国語を使用する訓練をする。

この目標内容を見ると、タイでは英語によるコミュニケーション能力の習得に力を入れていることがわかる。

## 2. 研究の目的

アジアの EFL 環境にある中国、台湾、タイの中学1年の英語教科書を、リーダビリティ分析およびコレスポンデンス分析を使用して、3カ国の教科書のそれぞれの特徴を明らかにし、さらに日本の教科書ともコレスポンデンス分析を行って、国別の違いや特徴などを明らかにすることが本研究の目的である。

## 2.1 リサーチクエスチョン

研究目的を具体的に示すために、以下のリサーチクエスチョンを設定した。

1. 日本の学年レベル測定では、中国、台湾、タイの中1英語教科書はどのレベルを示すのか。
2. 中国、台湾、タイの中1英語教科書を比較した場合、どのような特徴が明らかになるか。

## 3. 分析方法

本研究では2種類の分析を行った。まず、日本の学習指導要領に準拠した学年レベルの測定（リーダビリティ分析）を、Ozasa-Fukui Year Level (OFYL) を使用して行った。OFYLは日本の中学から高校までの学年レベルを指標として測定するリーダビリティ分析ツールである。この技術的、理論的な説明は福井・小篠（2017）で詳しくなされている。

次にコレスポンデンス分析（CR分析）を行った。コレスポンデンス分析では、「頻度表における行・列の関係を組み替え、頻度表に含まれる情報を少数の成分にまとめることで、行・列を直観的に解釈することが可能になる」（石川、2010, p. 245）ので、テキストの比較分析では、分析対象テキストが視覚的に付置されるので、複数のテキストの相対的な特徴が明確になる利点がある。

## 4. 結果と考察

### 4.1 リーダビリティ分析

現行の学習指導要領に準拠した学年レベルの測定を行う Ozasa-Fukui Year Level, Ver. 3.5nhnc1-6 を使用して、中国、台湾、タイの中1教科書のリーダビリティ分析を行った。表1がその結果である。

	Year level
Taiwan (ACCESS)	1.96
Thailand	1.85
China	1.73

表1 OFYLによる学年レベル

Year Level の数値は日本の中学1年を1、順に中2が2、さらに高1は4、高3は6、で表される。3カ国の中1教科書はいずれも1点台にあるので、日本の中学1年レベルにあるということになる。測定値が最も高かったのは台湾で、1.96 は日本の中学1年後半のレベルにあることを示している。最も低い中国でも、1.73 である。日本の中学の教科書は平均の1.5 であるので、それよりはいずれの国の教科書も若干高いレベルにあるということがわかる。

## アジアの英語テキストの比較分析

3カ国とも小学校から英語が導入されており、中学1年の時点ですでに6年間の英語学習期間があるが、教科としては中学1年から英語が導入されている日本の教科書と学年レベルがほぼ同じであるということが、この測定結果からわかった。

### 4.2 コレスポンデンス分析

#### 4.2.1 分析手順と結果

コレスポンデンス分析の手順としては、まず、各教科書ごとに単語の頻度表（出現数）の集計表を作成する。これには語彙分析ツールである AntConc (L. Anthony) を使用した。次に、各教科書の単語集計表を統合してクロス集計表を作成し、さらに、集計表から固有名詞を取り除き、上位100語をCR分析にかけた。

表2は各成分の3カ国の教科書の数値である。教科書が3種類であるので、成分は2つ抽出された。第1成分においては正方向では台湾、負方向では中国が最も数値が高く、次にタイが来ている。CR分析においての正と負には特別な意味はなく、第1成分における対照的な2つの語群を示している。第2成分では、正方向にタイ、負方向には中国が最も高く、次に台湾が来ている。

	第1成分	第2成分
China	-0.966	-0.925
Taiwan	1.417	-0.399
Thailand (ACCESS)	-0.31	1.405

表2 中国、台湾、タイ CR分析成分表

表3は成分ごとの寄与率等の数値を示している。第1成分の寄与率が0.643で、データ全体の64%程度を説明しているということになり、第2成分の寄与率が0.357で、全体の36%程度を説明していることになる。

	第1成分	第2成分
固有値	0.061	0.034
相関係数	0.248	0.185
寄与率	0.643	0.357
累積寄与率	0.643	1

表3 中国、台湾、タイ CR分析寄与率等

図1は、表2の数値をもとに第1成分の数値を横軸、第2成分の数値を縦軸に付置した散布図である（ACCESSはタイの教科書）。3カ国の教科書が相対的に明確な特徴を持っていることが視覚的に示されている。

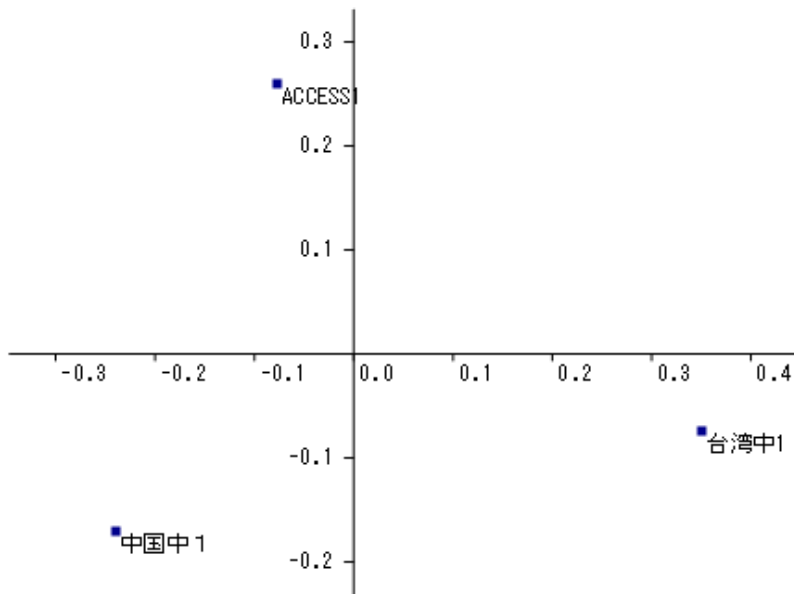


図1 中国、台湾、タイ（ACCESS）CR分析散布図

#### 4.2.2 軸の解釈

次に、各成分が示す教科書の特徴についての見解を示す（軸の解釈）。これについては、「分析者が統合的に判断」することができるとされている（石川、p. 256）。解釈のもとになるものは、成分ごとの正方向、負方向に振り分けられた語群である。

表4は第1成分の正方向の上位語群である。表の上から下に数値の高い順に並べられている。表2の第1成分の数値や図1の横軸上の各教科書の配置が示す通り、上位語群のほぼすべてが台湾の教科書のものであることがわかる。一方、表5は第1成分の負方向の上位語群である。表の下から上に高い数値（マイナス側）順に並べられている。正方向の語群ほど明確ではないが、中国の教科書とタイの教科書で使用されている単語が多いことがわかる。

表2の第1成分の数値結果が表すとおり、数値順では、1. 台湾、2. タイ、3. 中国となる。この順序は、表1のOFYL分析による学年レベルの測定値の順序と同じである。表4では、'every,' 'day,' 'house,' 'here,' 'now,' 'read,' など会話、家庭、物語を示唆する語が上位に来ている。1.2で述べたように、台湾の学習目標の中に物語、寸劇などが含まれているように、ストーリー性のある文章が多く含まれていることも、特徴の一つになっている。一方、表5の負方向の語群には、'complete,' 'questions,' 'sentences,' 'answer' などの教科書のエクササイズで使用される語が多く上位に来ている。実際、中国の教科書やタイのACCESSにはエクササイズの量が多く、リーディング用の文章は台湾と比べると少ないように見受けられる。これらのことから第1成分は各教科書の難易を表すと考える。中国の教科書が知

## アジアの英語テキストの比較分析

識の習得だけではなく、習慣や人生観を学習目標にあげていることが大きな特徴になっているため、他の2カ国の教科書と比べると英語の難易度のレベルが低くなっている理由の一つと考えられる。

	第1成分	中国	台湾	タイ
every	3.384	7.18	<b>33.75</b>	5.77
don't	3.359	0	<b>37.42</b>	19.22
day	3.1	14.87	<b>67.51</b>	16.82
old	2.607	6.67	<b>38.89</b>	20.19
please	2.348	11.8	<b>31.55</b>	9.13
which	2.319	2.56	<b>29.35</b>	23.55
house	2.273	4.62	<b>27.88</b>	19.22
not	2.04	20	<b>52.83</b>	23.07
here	1.74	11.8	<b>27.88</b>	14.9
now	1.717	11.28	<b>28.62</b>	17.3
is	1.645	192.86	<b>409.5</b>	207.62
new	1.475	6.16	<b>19.81</b>	18.74
she	1.408	46.68	<b>105.7</b>	78.34
much	1.38	15.39	<b>25.68</b>	11.53
there	1.337	31.29	<b>80.72</b>	73.53
time	1.325	20.52	<b>34.49</b>	17.3
look	1.15	21.03	<b>40.36</b>	32.68
he	1.127	77.45	<b>141.6</b>	110.06
read	1.066	21.54	52.1	<b>58.63</b>

表4 CR分析第1成分 正方向上位語群

	第1成分	中国	台湾	タイ
make	-1.031	<b>28.21</b>	12.47	14.9
answer	-1.143	22.57	9.54	<b>30.28</b>
like	-1.224	<b>100.53</b>	38.89	41.81
when	-1.32	<b>24.62</b>	8.81	22.11
got	-1.328	1.54	0	<b>51.43</b>
about	-1.411	<b>80.53</b>	26.42	75.94
get	-1.462	<b>39.5</b>	13.21	6.73
match	-1.554	<b>29.24</b>	8.81	14.9
words	-1.57	<b>55.4</b>	16.14	36.05
people	-1.692	27.7	6.6	<b>27.88</b>
them	-1.712	19.49	4.4	<b>21.63</b>
sentences	-1.973	16.41	0.73	<b>36.05</b>
school	-2	<b>78.99</b>	16.88	26.43

things	-2.635	<b>38.98</b>	4.4	9.13
questions	-2.666	<b>38.47</b>	0	33.64
complete	-2.868	<b>32.31</b>	0	20.67

表5 CR分析第1成分 負方向上位語群

第2成分では、表2と図1の縦軸上の各教科書の配置が示すように、正方向ではタイ、負方向では中国が最も高く、次に台湾が来ている。第1成分ほど明確ではないが、表6と7の語群からも、正方向語群にはタイの教科書のものが多く、負方向語群には中国のものが多くことがわかる。

	第2成分	中国	台湾	タイ
got	7.246	1.54	0	<b>51.43</b>
sentences	3.585	16.41	0.73	<b>36.05</b>
use	3.503	10.77	11.01	<b>37.49</b>
room	3.206	8.72	9.54	<b>27.88</b>
of	2.174	59.5	52.1	<b>120.15</b>
very	2.008	15.9	13.94	<b>30.28</b>
an	1.987	16.41	14.68	<b>31.24</b>
which	1.857	2.56	<b>29.35</b>	23.55
read	1.707	21.54	52.1	<b>58.63</b>
answer	1.552	22.57	9.54	<b>30.28</b>
new	1.542	6.16	<b>19.81</b>	18.74
was	1.5	20.52	21.28	<b>34.6</b>
great	1.389	14.87	10.27	<b>21.15</b>
from	1.32	30.78	16.14	<b>39.89</b>
them	1.263	19.49	4.4	<b>21.63</b>
see	1.239	14.87	13.21	<b>21.63</b>
there	1.231	31.29	<b>80.72</b>	73.53
house	1.215	4.62	<b>27.88</b>	19.22
don't	1.154	0	<b>37.42</b>	19.22

表6 CR分析第2成分 正方向上位語群

表6の正方向の上位群には、エクササイズの問題文を示唆する ‘sentences,’ ‘use,’ ‘read,’ ‘answer’ などの語が多く見られる。実際、タイの教科書 (ACCESS) はエクササイズが占める部分がかかなり多い。ACCESSの出版社である Express Publishing のウェブサイトにもこのテキストが4技能を中心とした練習を特徴としていることが記されている (ACCESSウェブサイト)。一方、表7の負方向の上位群には、‘picture,’ ‘talk,’ ‘good,’ ‘school,’ ‘play,’ ‘name’ などの教師による指示文を示す語が多い。実際、中国の教科書は教員の指示によ



## アジアの英語テキストの比較分析

って生徒同士での会話や、教員の質問に答えるというようなスピーキングを使用しての活動が他の教科書よりも多く見られる。したがって、成分2では、正方向にはリーディング中心のエクササイズ、一方負方向には会話中心のエクササイズという特徴が示されていると考える。

	第2成分	中国	台湾	タイ
does	-1.053	32.83	<b>33.02</b>	19.22
please	-1.103	11.8	<b>31.55</b>	9.13
yes	-1.182	<b>56.93</b>	<b>53.57</b>	30.76
do	-1.19	<b>119.51</b>	82.92	61.04
no	-1.225	50.78	<b>62.37</b>	28.36
I	-1.283	<b>233.89</b>	146.02	112.46
up	-1.382	19.49	25.68	10.09
every	-1.393	7.18	<b>33.75</b>	5.77
have	-1.42	<b>68.73</b>	41.83	30.76
then	-1.477	<b>45.14</b>	9.54	18.26
like	-1.487	<b>100.53</b>	38.89	41.81
name	-1.729	<b>40.01</b>	28.62	15.38
play	-1.774	<b>48.22</b>	27.88	17.78
school	-1.889	<b>78.99</b>	16.88	26.43
birthday	-1.939	<b>28.72</b>	16.14	9.61
good	-2.007	<b>37.44</b>	20.55	12.02
talk	-2.364	<b>24.62</b>	13.94	6.25
picture	-2.406	<b>31.29</b>	18.34	7.69
things	-2.577	<b>38.98</b>	4.4	9.13
get	-2.948	<b>39.5</b>	13.21	6.73

表7 CR分析第2成分 負方向上位語群

### 結論

中国、台湾、タイの中学校1年の英語教科書を分析した結果、次のことがわかった。

1. 日本の学年レベルの測定 (OFYL) では、台湾、タイ、中国の順序になったが、三種類とも平均すると日本の中学1年の後半レベルにある。
2. コレスポネンス分析による第1成分は、OFYLによる結果と同様の順序を示している。第1成分は各教科書の難易を示していると考えられる。
3. コレスポネンス分析による第2成分は、教科書の内容やエクササイズの種類を示しており、台湾は物語などのリーディング教材が多く、中国は会話のエクササイズが、またタイは4技能を満遍なく行うエクササイズが多いことが示された。

以上がまとめであるが、各国が公開している「学習到達目標」は学年レベルではなく、小学校、中学校、高校と学校ごとのものが多い。従って、「学習到達目標」と教科書の内容を照らし合わせるという分析を正確には行えなかった。これは今後の研究課題としたい。

## 語彙分析ツール

AntConc Lawrence Anthony (早稲田大学) <http://www.laurenceanthony.net/software.html> からダウンロード。

## 参考文献

- 石川慎一郎、前田忠彦、山崎誠 (編著) (2010). 『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- 坂元真理子、張世霞 (2017). 「中国と日本の英語教科書における時制と相の扱いに関する分析」33-45.
- 福井、小篠 (2017). 「リーダビリティ測定ツール、Ozasa-Fukui Year Level システムと測定プログラム」『日本言語教育 ICT 学会紀要』 第4号 1-12.
- 文科省資料 鈴木康郎 「タイにおける小学校英語教育の現状と課題」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/s004\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/s004_4.pdf)  
(閲覧日：2017年11月22日)
- 文科省資料「諸外国の外国語教育における目標について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/1300649\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryu/_icsFiles/afieldfile/2011/01/31/1300649_05.pdf) (閲覧日：2017年11月22日)
- 文科省資料 「タイにおける小学校英語教育の現状と課題」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/009/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/009/002.htm)  
(閲覧日：2017年11月22日)
- ACCESS <https://www.expresspublishing.co.uk/en/content/access-1> (閲覧日：2017年11月22日)
- Evans, V. & Dooley, J (2012-2013). *Access, Student's Book, 1*. Express Publishing.

## Comparative Study of English Textbooks in Asia

Kiyomi WATANABE<sup>\*1</sup> Masayasu FUKUI<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> *Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

<sup>\*2</sup> *Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

Abstract: China, Taiwan, and Thailand all have EFL backgrounds quite similar to that of Japan. We conducted quantitative analyses on junior high school first year English textbooks of these three countries to study their characteristics. The measurement of their readability levels according to the school year of Japan by *Ozasa-Fukui Year Level* sets Taiwan at the highest level followed by Thailand and China. They are all measured according to junior high first year level. The Correspondence Analysis produced two features; the same readability level as *Ozasa-Fukui Year Level* and the characteristics of the exercises in the textbooks indicates that Taiwan focuses more on reading, China more on conversation, and Thailand is in the middle, dealing with all four skills equally.

Key Words: English textbooks analysis, correspondence analysis, readability analysis

渡辺 清美、福井 正康